

# 『大日向村の46年 満州移民・その後の人々』

本映画の製作にあたっては、地域医療の先駆であり佐久地域の医療拠点である佐久総合病院が協力しました。グループ現代は、『大日向村の46年』以前にも、佐久総合病院と協同で記録映画作品をいくつかを製作してきましたが、その関係史の中においても注目されるべき作品です。

映画は、明治30年代後半～大正時代初期（1900年代～1910年代）生まれの元開拓移民の女性たちの証言が中心となっています。証言者の多くが鬼籍に入っており、映画製作当時50～60代であった証言者も80～90代になる今、改めて本作が見直されるよい機会と考えます。どの地域に於いても、戦争を体験した当事者が減少していくなかで、どのように語り部を受け継いでいくかということが課題となっておりますが、そうしたなかであって、本作は重要な役割を果たすことと思います。

昨年、阿智村の満蒙開拓平和記念館と当地である佐久穂町の茂来館で上映を行いました。この度は、長野と松本で行いますが、ぜひお誘いあわせの上、上映会にお越しください。

## 【開催情報】

**8/27(土)** 長野市女性会館しなのきホール **8/28(日)** 才能教育会館ホール

上映時間 | (1) 13:30 (2) 18:30 \* 両日 1日2回上映

チケット | 一般前売り 1000円 (当日 1200円) 大学生以下 500円 (当日 700円)

お問合せ | ☎ **長野映研** ☎ 026-219-3868 FAX 026-219-3869

E-mail [naganoeiken@ebony.plala.or.jp](mailto:naganoeiken@ebony.plala.or.jp) WEB <http://www.naganoeiken.jp/index.html>

## 【会場詳細】

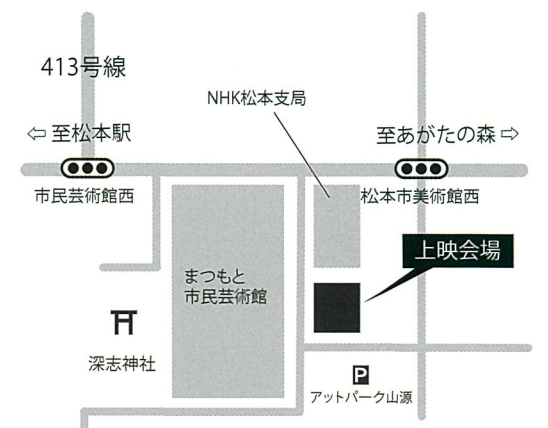
■8/27(土)長野会場：長野市女性会館しなのき  
〒380-0814 長野県長野市西鶴賀町 1481-1  
TEL026-237-8300



長野駅よりアクセス

- ①電車：長野電鉄乗車→権堂駅下車、徒歩2分
- ②バス：長電バス乗車→権堂下車、徒歩2分

■8/28(日)松本会場：才能教育会館  
〒390-8511 長野県松本市深志 3-10-3  
TEL0263-32-7171



松本駅 お城口(東口) 出口よりアクセス

- ①あがたの森大通り徒歩15分
- ②アルピコバス/タウンズニーカー乗車→市民芸術館下車、徒歩2分

### 注意事項

- チケットは1日1回限り有効 ●各回完全入替制 ●自由席(先着順でのご入場) ※当日の混雑状況によってはご入場いただけない場合がございます
- 感染症対策の為、ご来館時はマスクの着用、こまめな手洗い、手指の消毒のご協力をお願いいたします ●当日の体温が37.5度以上の方や体調に不安のある方はご来場をお控えください
- 両会場ともに専用の駐車場はございません。公共交通機関または近隣の駐車場等をご利用ください

# 大日向村の46年

## 満州移民・その後の人々

### 第一部 分村移民の軌跡

### 第二部 語る

### 過去と現在をつなぐもの

長野県南佐久郡の山間にある佐久町大日向(現・佐久穂町)はかつては「大日向村」と呼ばれ、昭和十三年全国ではじめて村の半分という大規模な開拓団を旧満州へと送り出しました。

当時その出来事は模範的な農村の姿として称賛され、和田傳氏により小説「大日向村」が書かれ、前進座により劇となり、豊田四郎監督のもと映画「大日向村」が製作されました。

こうしてそれまでは何げない一山村であった「大日向村」の名は一躍日本国中に宣伝され、以後全国から多くの満州開拓団を送り出す役割を果たしていったのです。

満州大日向村は開拓のモデルケースとされるために旧満州でも格好の土地を与えられたと言われています。しかしそれから僅か八年足らずで大日向村の「王道楽土」の夢は崩れ去りました。敗戦により満州大日向村を脱出した人々は長春(旧新京)での一年近い難

民生活の間に団員(六七四名)の半数以上を亡くし、昭和二十一年九月、ようやくの思いで母村大日向村に引き揚げてきましたが、移民した際に財産は一切処分していたためにそこに長く留まることが出来ず、昭和二十二年二月、六十五戸一六五名の人々は再び故郷を離れ、浅間山麓の開拓に入り、もう一つの大日向―軽井沢町大日向をつくりました。

こうして現在、長野県の車で僅か一時間ばかりのところにある二つの大日向があるのです。

昭和五十九年夏、私たちはこれまで「幻の映画」と呼ばれていた劇映画「大日向村」が発見されたことをきっかけに二つの大日向村を訪れました。昭和十三年の満州への出発から実に四十六年の歳月が流れていました。

構成/若月健一・小泉修吉・山本常夫 演出/山本常夫 撮影/山口誠・沢崎正節  
撮影助手/田村圭三 VE/岡田一明 ナレーション/村松康雄 プロデューサー/小泉修吉  
協力/佐久町大日向の皆さん 軽井沢町大日向の皆さん 佐久町教育委員会 東宝株式会社  
制作協力/映画「大日向村」を観る会 佐久総合病院映画部  
1986年/デジタル/カラー/155分 配給:グループ現代



## 満州を語りはじめの人々

『満州』というものは私たち戦後生れの世代にとっては遠い過去の出来事の様にも思えます。しかしその反面、過去の出来事としてフタをしてしまふには余りに昭和の日本というもの、あるいは日本人というものを象徴する出来事のようにも思われます。

昭和59年の夏、私たちはそれ迄なくなっていたと思われる映画『大日向村』（1940年／豊田四郎監督）の発見を契機に長野県にある二つの大日向を訪れました。満州分村移民を送り出した佐久町大日向（現佐久穂町）と満州から引き揚げて来た人々のつくった軽井沢町大日向です。

こうした二つの大日向で私たちは満州に移民した人々を訪ね、一人一人が自分たちの『満州体験』を語り出してくれるのを待ちました。大日向の皆さんにとっては私たちの様な突然の闖入者に対して自分たちの貴重な体験を語るには余程の決断を要したことでしょう。そしてやがて語り出される言葉を私たちはカメラで記録していったのです。

しかしそれはただ単に『満州』という過去の事実を記録しようとするだけではありませんでした。むしろ『満州』への出発から40数年にも及ぶときを過し、その間に王道楽土を

夢見、一転して肉親の死に出逢い、自らも死地を彷徨った人々が、現在語り始める言葉に静かに耳を傾けたかったのです。

撮影を進める中で46年という歳月が余りにも長い時間であることを実感しました。語る皆さんの中には確実に記憶の風化現象というものが存在しているのです。そして皆さんは過去の体験について語りながらも、実はそれ以上のもの——つまりその後の生き様などについても語っている様に私には感じられました。語られる言葉は一方では強烈な体験について語りながらも、またその一方ではその後46年間を生きる上で組み変えられていった言葉であるのかも知れません。『満州』にまつわる様々な体験——喪失そして欠如とともに、生き始めた人々。沈黙と自らに語り聞かせる言葉。46年という時間を経過して、初めて私たちに語り始めてくれた人々——の記録です。

山本常夫

### ■山本常夫監督プロフィール

1947年生まれ。東京都出身。早稲田大学政治経済学部卒。教育映画、ドキュメンタリー番組の演出に携わる。本上映作品と平行して、「楽士のシナリオ」朝日放送）を演出。1992年、制作会社「バク」設立。主にNHK番組などのプロデュースを担い、主な作品には『老いて遊んで学ぼう』白川静・漢字の宇宙』など。最近では、『大平農園40年目の四季』（2018年）『大平農園40年目をつなぐ』（2021年）などを制作。

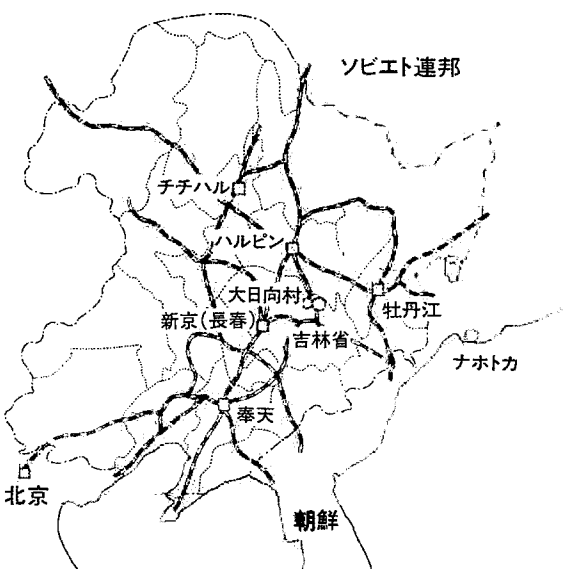
## 登場する人々のプロフィール（1986年当時／グループ現代提供）

### 武者政子（大正三年生まれ）

昭和十三年、夫とともに子ども三人を連れ渡満。満州で子ども三人を生むが、敗戦により夫と四人の子どもを失い、二人の子どもを連れ引き揚げてくる。その後は行商や山仕事をしながら二人の子どもを育てあげ、現在は佐久町大日向で一人暮らす。

### 小須田ためい（明治三十六年生まれ）

昭和十三年、夫とともに子ども五人を連れ渡満。満州で二人の子どもを生むが敗戦により夫と二



■『大日向村の46年』作品概要  
1986年／2時間35分／カラー  
演出／山本常夫  
構成／若月健一・小泉修吉・山本常夫  
撮影／山口誠・沢幡正節  
ナレーション／村松康雄  
プロデューサー／小泉修吉  
配給／グループ現代  
受賞歴／1986年度キネマ旬報  
文化映画ベスト・テン第2位

## 佐久総合病院とグループ現代

佐久総合病院では医療だけでなく様々な文化活動が病院で行われていました。昭和27年院内に映画班（後の映画部）が発足し、地域住民に向けた保健衛生や病院の記録映画の製作を始めます。昭和42年、そんな佐久総合病院の協力を得て、のちのグループ現代代表となる小泉修吉氏は、記録映画『農業禍』（1967年）を製作しました。この作品を

きっかけに、映画製作会社「グループ現代」が同年設立されました。グループ現代と佐久総合病院は、その後も映画製作を通じた交流を続け、のちに『老いる 5人の記録』（1979年／監督小泉修吉／助監督山本常夫／撮影山口誠）や、『大日向村の46年』（1986年）が生みだされました。

人の子どもを失う。引き揚げ後は、浅間山麓に五人の子どもを連れ入植し、現在は軽井沢町大日向で民宿を営む。

### 由井はるみ（明治四十三年生まれ）

昭和十三年、夫とともに子ども二人を連れ渡満。満州で二人の子どもを生むが敗戦により夫と四人の子ども全部を失い単身で引き揚げてくる。その後は佐久町大日向に近い南佐久郡八千穂村で農業をしながら一人暮らす。

### 由井マサミ（昭和四年生まれ）

昭和十四年、十歳の時に家族とともに渡満、父親の出征中に敗戦となり母親と七人の兄弟全員を失い、十七歳の時単身で引き揚げてくる。その後、佐久町大日向で結婚し、二人の子どもを育てあげる。マサミさんは長女が結婚する時に自分の体験を綴ったノートを持たせた。

### 小須田愛子（昭和四年生まれ）

昭和十三年、八歳の時に家族とともに渡満。敗戦により両親を失い、十七歳で四人の弟妹の面倒をみながら引き揚げてくる。その後、弟妹を

連れ一家の主として浅間山麓の開拓に加わり、四人の弟妹を独立させた現在は軽井沢町大日向の保育園で給食の仕事をしながら一人暮らす。

### 坪井みどり（明治四十三年）

昭和十三年渡満し、満州大日向村で結婚式をあげ二人の子どもを生む。敗戦直前、夫が病気でなり次男を連れハルピンの病院で看病にあたるが、夫は病死し、敗戦により満州大日向村に残しておいた長男とは現地で生き別れる。その後、坪井さんは次男とともに浅間山麓の開拓に入り、現在は次男一家とともに軽井沢町大日向で暮らしながら中国のどこかにいるであろう長男を想う。

### 畠山とり（大正十一年生まれ）

昭和十七年、二十歳の時に渡満。昭和十九年に満州大日向村で結婚式をあげるが夫は間もなく現地召集され、敗戦となる。その後、畠山さんは長春（旧新京）に留まり昭和四十八年頃単身帰国する。

現在は佐久町大日向にほど近い病院に勤め一人暮らす。